たちは今……

日下圭介

講談社

著者略歴
本名、戸羽真一、昭和15年1月和歌山県海南市に生まれる。早稲田大学第一商学部卒業後、協和醗酵、東京イングリッシュセンターを経て昭和40年朝日新聞社に入社、現在整理部記者。
現住所、千葉市稲毛海岸3丁目団地2ノ205

蝶たちは今……

第1刷発行　昭和50年8月28日

著　者　日下圭介
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)
振替　東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© KEISUKE KUSAKA 1975

定価はカバーに表示してあります。　(文2)

目次

終局回帰……5
死者同士……9
ゆうれい……42
放浪の虫……68
女の航跡……100
わるい夢……147
探り合い……175
そして死……240
未明の声……269
崩れる壁……299
絶望の時……337
影の正体……340
蝶舞う朝……349
選考経過報告……351

装幀　滝野晴夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蝶たちは今……

終局回帰

1

木も草も、朝の光に輝いていた。
山々は緑の上に金粉をまいたように見えた。
いたる所で小鳥が鳴いた。
その別荘は一段、高い所にあり、木立ちに囲まれていた。そのために道路からは、青い屋根しかみえなかった。
道路に、小さな人垣が出来ていた。ほとんどが、この辺りの別荘や寮の管理をして生活している人達だった。人達は背伸びし、別荘で何が起ったか知ろうとした。
ジープが二台、停っていた。横腹に、警察の名が読みとれた。別荘へ通ずる石段があったが、ロープが張られ、制服の警官が緊張した顔で立っていた。

人垣の中の一人が勇気を出した。彼は警官の方へ歩み寄り、聞いた。
「心中ですってね。アベックですか」
「さあ……」
警官は仏頂面のままだった。
男は、あきらめ人垣の中に引っ込んだ。中年の女が、彼にこうささやいた。
「アベックなんですよ。うちの主人が見つけたんですよ。男の方は首を吊ってたんですって。彼女の方は蒲団の上で死んでたらしいんだけど」
人々の関心はエプロン姿の女に集まった。人垣の中心は女になった。女は得意にならざるを得ない。続けた。
「それがねえ。首を吊った男の方は外人なんですよ」
人垣の間に驚きの声が伝わった。
「女の方は日本人なんだけどね。きのうも私、そこで会ったんだけど、きれいな娘さんだったわよ」

2

美栄子は、目を見開いていた。恐怖のせいであった。思わず、手鏡を握りしめた。青銅の柄が、掌に重かった。
振り上げた。窓からの光が鏡に当った。白い反射光が、一瞬、天井に丸い輪を作った。
力いっぱい打ち下した。
丸い光の輪が走った。ガラスが砕けた。乾いた音が部屋中に響いた。
命中――。唐草模様の縁の下で、蝶はつぶれていた。だが、死んではいなかった。蝶はまだ右の前

翅を、懸命にふるわしていた。

——その沈み切った透明な黒さ——。

美栄子はわれに返った。われに返ると、哀しみが突き上げてきた。のろのろとした手つきで、細かくなった鏡の破片を拾った。友人のギリシャ土産の手鏡だった。

集めたかけらの上に、蝶を、そっと乗せてやった。蝶は死ぬ直前にあった。鏡の破片のせいで蝶は何匹にも見えた。無数の蝶が、無数の苦しみに、もがいているようであった。美栄子は、のぞき込んだ。

死を待つ蝶の上に、美栄子の顔が、かぶさって見えた。隠しようもない四十女の顔。彼女は目を外した。

〈私は蝶が憎い。なぜだろう〉

その理由は分っていた。

彼女はスチールの机の、一番下の引き出しの鍵を外した。部厚いノートの間に、それはあった。

一枚の葉書だ。

「——東京都港区青山四丁目——　柳原英会話学院、理事長、柳原美栄子様」

稚拙な字だ。この文字を何度、読まされたことか。

差出人の名は、ない。

そして裏には——

一匹の蝶。黒い蝶の版画。

それだけである。

〈忘れよう。蝶のことなんか……。もう忘れてもいい。忘れることが出来るんだわ〉

美栄子は葉書を、引き裂いた。灰皿の上で火をつけた。赤い炎が、ゆらゆらと立のぼった。炎を見て、気が静まった。誰もいなくてよかった、と思った。——特に秘書の小森京子がいなくて……。あんな娘に、取乱した姿を見せたくない。

窓を開けた。

車の騒音が五階まで届いた。

青空だった。遠くのビルが白っぽく見えた。風が入って来た。五月の風だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死者同士

1

喘息持ちのように喘ぎながら、バスは登り続けた。飛騨の山は、高くなるに連れ、春から遠ざかって行った。麓で見た新緑や陽炎は影を潜めていた。高木が山を包んでいたが色彩は乏しかった。

バスはむせび泣き、悲鳴を上げ、やけっぱちみたいに排気ガスを吐き、それでも葛折りを登り切った。

平湯峠は海抜千六百八十四メートル。

二十分間の休憩を運転手は宣言した。連休が終ったというのに、座席は乗客でふさがれていた。ほとんどが康雄達と同じ年頃で、同じような登山の格好をしていた。彼等は、申し合わせたように背伸びをし、ぞろぞろと降りた。

康雄と拓也も、彼等にならって荷物を網棚に残して続いた。

風が強い。痛いほど冷たい。黄昏が始まっていた。白山の山々の、シルエットが、オレンジ色の雲の下に浮んでいた。

反対側には乗鞍、槍ケ岳が近い。まだ残雪をたっぷり乗せていた。

康雄と拓也は、木の柵に腰を預け、山を眺めた。

「つまんねえな」と、拓也がつぶやいた。
「ああ」と康雄は答えた。
山鳩が、近くで鳴いた。
同じバスの客たちは騒々しかった。売店の前に鎖でつないである仔熊をからかっては嬌声を上げたり、記念撮影のアベックに、下手な冗談を飛ばしたりしている。
「金が欲しいな」
拓也がため息と一緒に不景気な声を吐き出した。
「ああ」康雄が答えた。
この短い会話を何度、交したことか。
二人にとって、共通の関心は金だけだった。いや、金以外にもなくはなかったが、金さえあれば解決できそうに思えた。
いつしか風がやんでいる。だが、山の空気は一層冷たい。わずかな間に、落日が終わり、東の空が濃い藍色に変わっていた。
登山姿の連中は相変らず、はしゃいでいる。動こうともしないのは二人だけだった。
いや、もう一人いた。バスの向うの、低い木の下に、さっきから娘が一人、動こうともしない。黒いセーターに、黒いスラックス。何を見ているのだろう。彫像みたいだ。遠いし、逆光なので美人かどうかは分らないが、短かくカットした赤っぽい髪が見えた。
バスの時間が来た。

2

平湯温泉で降りた時は、夜が始まっていた。宵闇の中に、白樺の樹肌が浮んで見えた。ひとにぎりの家並みが、山ひだの底にあった。二人の宿は、その一番外だった。山小屋のように軒が低い。

通された部屋の窓から、黒々とした山塊が見えた。

「寒いな。風呂へ行こう。それから飯だ。なあ、嘉川、今夜は少し飲まないか。どうせあすは東京へ帰るんだ。残った金、使っちゃおう」

拓也はそう云って、康雄の返事を待たずにデニムの服を脱ぎ始めた。

「いいだろう」

「まず風呂だ。旅の垢を落とそうぜ。そうだ、ついでに髭も落とそう。お前、髭剃り持ってたな。お前も剃った方がいい、あしたは彼女に会うんだろ。大分、伸びてるぜ」

「そうしよう」

康雄は苦笑しながら、ボストンバッグを開いた。

その途端、彼は叫んだ。

「やられた」

「どうした。時限爆弾でも仕掛けられたか」

「これ、おれのバッグじゃないんだ」

「どうしたんだ、一体」

「誰かが、間違えたらしい」

「ばかな奴だ。いや、すり変えた方がさ」

二人はバッグを中にして、パンツ姿のままかがみ込んだ。小さなズックのバッグ。紺のチェック

柄。なにからなにまで、そっくりである。だが、見憶えのある把っ手のところの小さなシミがこれにはなかった。

さかさにして、中身をかき出した。

グレイのカーディガン、折りタタミの花模様の傘、タオル、サングラス、すみれ色のスカーフ、化粧品入れ——中にはクリーム三種、口紅、ライター型の香水スプレー、ヘアカーラー、ヘアブラシ——時刻表、旅行案内書、蝶の形のブローチ、高山土産の小糸焼の小さな花器、絵葉書……。

それに封筒が一通。

宛名は岡山県和気郡——町——　妹尾(せのお)秀人様。差出人は女の名前だ。東京都大田区田園調布——吉村司造方、蓮田(はすだ)直子。

「ラブレターだぜ。あけてみようか」

拓也が云った。

「よせ」康雄があわてて止めた。「他人の手紙なんぞ、どうでもいいじゃないか」

塩けを含んだ湯が皮膚に重い。二人は浴槽に思う存分、手足を伸ばす。身体中を血が馳けめぐってゆく。

「どこでバッグを取り違えたんだ」

「取り違えたんじゃない。取り違えられたんだ」

「どっちでもいい、どこでなんだ」

「高山でバスを待ってる間かな。いや違う。バスの中で一度、バッグを開けたからな。そうすると……。うん、多分、平湯峠だ……」

「一休みしている間にか」
「そうだ。それしかない」
「そうか、網棚に置いたまま外へ出たからな。だけど、変だな」
そう云って拓也は湯船を出、浴槽のすみにあるガラス窓を開けた。ほてった躰に、冷気が心地よい。静かだ。
「どうする」
「彼女も今頃、たまげてるぜ、きっと」
康雄は日焼した裸身に、石鹸を塗りたくりながら、愉快そうに云った。
「そうだろうな。お前のバッグには何が入ってたんだ」
「くさい靴下とよ、汗ばんだ下着と、洗面道具、それに新書本が二冊、空飛ぶ円盤の本とフランス革命のさ」
「変な取合せだ」
二人は声を上げて笑った。湯気の中でこだまを作り、驚くほど大きく増幅されて返って来た。
「それにみやげが二つ。あれは惜しい。いや惜しいっていえば小さな懐中時計。おふくろの形見なんだがな。まあ、いい、形見はもう一つあるんだ」
「まあ、この取り違え事件、両方共損得なしってとこか」
また笑った。躰のすみずみまで行きわたった血のぬくもりが、二人を陽気にしていた。

夕食にビールをとった。贅沢をしたかったので、多いめに注文した。ジーパンをはいた宿の女が来、食卓の上にビンの小さな林を作った。

二人は、よくしゃべった。
「この旅行、悪くなかったよ」と拓也は云った。
料理の皿の数は、これまで泊った二軒の旅館よりも多かった。二人共、ひとかけらも残さずに平らげた。
部屋の隅に電話が鳴った。
「嘉川さまにお電話です」

3

電話は和子からだった。
「君かあ」
「まあ、ご挨拶ね。君かあはないでしょ」
「この宿、よく分ったね」
「知ってたわよ。あなたがたの旅行のコース、全部知ってるわ」
「もう風邪はいいの？」
「治ったの。しゃくみたい、一番悪い時に風邪なんか引くなんて。もう五日、どっちかへズレてくれればいいのに……」
「ツイてないんだ」
「私って、何やっても運が悪いのね」
「そういうこともあるさ」
「どういうこと？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com